



特選 若竹を走る早さの雨雫しずく

稲里町 田辺好子

(評) 爽快感あふれる作品。若竹の生長は目を見張る。初々しい緑の若竹の柔肌を透き通るような雨の雫が走る様子を「走る早さの」と捉えた表現は巧みで鋭く、句を引き締めている。梅雨の鬱陶しさを吹き飛ばすがすがしさがある。(治夫)

入選 指切りをしたままの友終戦日

本庄町 田口洋子

(評) 終戦後、六十九年の歳月が経ち、戦争が次第に風化の一途をたどっている現在であるが、作者にとっては、終戦日に鮮やかに蘇ってくるのが、あの「ゆびきり」をしたときのことである。無二の親友と、指切りし、何を誓ったのだろう、人生の切なさ、運命、無常感が深く滲む句である。(治夫)

入選 春泥をけんけんぱあと避け通る

長浜市 柴田弥藏

(評) リズム感のある楽しい作品。最近では外で遊ぶ子ども達の姿を見かけなくなりましたが、いつの時代も子どもは自然の中で育つものである。春泥をも遊び道具に、元気に飛び跳ねる子ども達を、頼もしく見守る作者の目は、子ども達の動作を軽妙に捉えている。(治夫)

特選 パレットに鮮やかな色山笑ふ

米原市 伊部正子

(評) 暖かくなり気候が良くなると、野山に出掛ける機会が増えて来る。掲句では、何色の絵具と言っていないが、パレットに出されている春らしく明るい緑を、想像する事が出来る。言い尽さなくても、情景の浮かぶ所がよい。(栄子)

入選 如月や托鉢僧の声通る

田原町 山脇千代子

(評) 如月(二月)は最も寒さの厳しい季節。吐く息が白く張りつめた空気の中、僧の読経が家の中まで通り抜けて行く。如月ならではの風景である。上五の「如月」と下五の「声通る」がうまく呼応している。比叡山延暦寺の僧の托鉢の姿が思い浮かぶ。(治夫)

特選 折詰の輪ゴム弾かせ花の宴

長浜市 樋口満智子

(評) 満開の桜の下、気の置けない仲間がシートを広げてさあ食事、花より団子とは正にこの事。折り詰めを開けようとして弾かせたのか、まだ持っている悪戯心で指鉄砲で飛ばしたのか。思わず微笑む楽しい句に仕立てた。(夏生)

入選 めり込みし轍の砂に草青む

野田山町 善利幸子

(評) 思わぬポイントに目をつけたところが良い。新鮮な作品。農道の轍であろうか。踏まれても踏まれても悪条件の轍から青い草、強靱な生命力に感動。(治夫)

入選 公平に齡重ねて初日受く

本町一丁目 中島 暉枝

(評) 世の中には理屈に合わない事や、不公平だと思える事が多
多ある。しかし、一日が二十四時間であるように、年を取る
のは皆同じである。妙に納得が出来る。

(栄子)

入選 尻上げて自転車を踏む新学期

東近江市 田中和子

(評) 新学期とあるから通学の自転車か、学校まで一寸距離のあ
る中学か高校。お尻を上げてこぐのはきつと上り坂。そんな
ことをものともしない元氣溢れる様を快詠。

(夏生)

入選 立春や自分史にある交差点

正法寺町 高井 豊

(評) 最近では自分史を綴る人が多いと聞く。来し方を振り返って
みて、ふと立ち止まったり、迷ったりしたのである。季節
の始まりである「立春」を持ってきた事により、前進する姿
勢が感じられる。

(栄子)

入選 堰あらば堰に小躍り春の川

西今町 前田 弘子

(評) 躓いたり乗り越えなければならなかったり、普通堰に出会
えば少し気分が萎えるが、水高の増えた春の川は堰で飛沫を
揚げたり光り輝いたりまるで嬉しがつるようだ。人生もこ
うして行こうと作者の提案。

(夏生)

入選 琴糸を紡ぐ村抱き山笑ふ

西今町 松本 いづみ

(評) 彦根に住む者としては、大音を思い浮かべる。繭から糸を
取る事自体が珍らしくなっている昨今、伝統を守り継ぐ大変
さを感じる。山里の閑かな暮らしを大切にしている人人に訪れ
る、閑かな春なのである。

(栄子)

入選 三月や曆に農事メモ確と

日夏町 寺村 房子

(評) 野に山に風も光りも春到来を告げる三月。冬の眠りから醒
めた田畑が待っている。農家にとっては忙しい季節の訪れだ
がそこに喜びが確りと感じられる。

(夏生)

入選 轆轤師の指先光る木芽風

日夏町 寺村 澄子

(評) 轆轤は木地細工や陶芸等で使われている。緑豊かな風に、
濡れた指先が光っているのだ。皿や湯呑み、いやもっと大き
な壺なのかも知れない。何れにしても、物を造る生き生き感
が伝わって来る。

(栄子)

入選 反骨の後姿や冬帽子

薩摩町 高橋 貞子

(評) 筋金入りの気性、誰が何と言おうと。そんな姿が見える。
「近ごろのやわな連中と一緒にしないでほしいぞ」台詞
まで聞こえてくるようだ。

(夏生)

佳作 売れ残り寒さ集める素焼き壺

東近江市 小林 清次郎

佳作 太き梁頭わに古刹堂寒し

芹橋二丁目 岩崎 英

佳作 苔まとひ三百年の梅香る

栄町二丁目 野村 代志子

佳作 里山の春のご馳走掌に

西今町 小沢 三男

佳作 姉卒寿わが米寿なる春の声

芹橋二丁目 伊藤 正子

佳作 宵戎空席のなきうどん店

米原市 赤井 千恵子

佳作 舟雅楽虫の音の池進み行く

愛知郡愛荘町 中村 慶子

佳作 子の四肢がここを天下と大昼寝

稲里町 田邊 ふみ

佳作 憂国の士の像にある春愁ひ

東近江市 小泉 壽幸

佳作 艦綱の水漬く一湾春浅し

城町二丁目 福原 芳江

佳作 春の風寝釈迦の足裏くすぐりて

東近江市 松本 ちずる

佳作 たむろして稚鮎不漁を託ちをり

芹橋二丁目 佐々木 久子

佳作 啓蟄や旅の雑誌を積む枕

西今町 秋口 大門

佳作 憤怒して不動明王冬日立つ

極楽寺町 古川 寛二

佳作 待つといふ楽しみありてけふの花

東近江市 河崎 章

佳作 汁椀の湯葉ほぐれゆく浅き春

稲枝町 谷口 清香

佳作 耳遠く黙して二人日向ぼこ

稲里町 藤野 千枝子

佳作 しばらくは酌まずに見ませ城の花

日夏町 寺村 しげる

佳作 待つことも惜しむも城の花ごころ

高宮町 前川 清隆

佳作 草芽吹く船板塀のすきまより

馬場二丁目 西村 節子

佳作 老幹に生きる証しの芽ぶきあり

中藪町 山川 美江

佳作 惚けるるに非ず春眠深きかな

馬場二丁目 清水 はる

佳作 日の匂ひ土に鋤き込み畑を打つ

米原市 日比 陽子

佳作 冬木の芽ひと芽ひと芽にある気迫

古沢町 大橋 しず

佳作 水の面を持ち上げ春の川流る

米原市 成宮 建男

佳作 蓮如忌に重ね母の忌正信偈

米原市 松村 武温

佳作 注連作る母に藁の香ただよひて

松原町 中島 房女

佳作 立春や見えない命見えてくる

甲田町 平田 政江

佳作 青空の天守押し上げ桜満つ

川瀬馬場町 西川 雪子

佳作 囀や余生の日々に足るを知り

米原市 西村 てる子

佳作 寒明し歩け歩けと医者 of 指示

肥田町 中江 陞

佳作 釣れて良し釣れなくもよし秋うらら

稲枝町 山本 正雄

佳作 平成を知らぬちはは春彼岸

日夏町 圓 敬子

佳作 道なりに川なりに湧く花の雲

西今町 勝 又 千恵子

佳作 万緑の中に天守の孤高なる

高宮町 前川 菅子

佳作 旅心流るる春の雲に乗せ

佐和町 大久保 豊子

佳作 獅子舞の遠笛村のはずれより

米原市 奥村 和子

佳作 庭先に節分あとの豆ひとつ

佐和町 大橋 洋夫

佳作 白障子影絵となりぬ座禅僧

稲里町 勝見 政恵

佳作 砂掘れば溢れくる水啄木忌

東近江市 坂口 靖子

佳作 若葉風窓全開の峠ごへ

松原町 北川 喜里恵

佳作 啓蟄や優しき色の靴を買ふ

松原一丁目 松林 秀子

佳作 春塵や机上に伏する農日誌

小野町 小野 和子



《総評》

今回応募数三百二十七句、いずれ劣らぬ力作であり、選をするのに苦勞しながらも、一方では、バラエティに富む句があり楽しく選句ができました。

それらの中で、特に印象に残ったことは、俳句としての伝統を大事にしなが、古いからを破って新しい視点から創造された句が出てきたことです。これは、それぞれの作者の研鑽の賜物であるとともに、歳月の経過、世代の交代による若者の進出も影響している結果だろうと思います。

俳句を続けていると、いつの間にか見方が固定的となり、手法も画一的になりやすいものです。

思い切つて、視点を変え、新しい発想で、季節の移ろいを鋭い観察眼で捉えるよう努めてみてはどうでしょうか。新しい世界が広がることでしよう。

彦根市が文化奨励事業として力を入れておられる「子ども文芸作品入選集」も年々応募の数も作品の質もぐんぐんと伸びてきました。嬉しいことです。若い力に期待しながら、みんなで俳句の裾野を広げていきたいものです。

藤田 治夫

選者吟

半蔀や秘仏へ届く余花の風

北川 栄子

まだ泳ぐつもり鯉を降ろしけり

北田 夏生

雪背負ひ際立つ連山湖囲む

藤田 治夫

